

危機と再生の中を生きる古代文学

孫 久 富

近年、IT革命やクローン技術等に代表されるハイテクサイエンスの日進月歩な発展を伴って、人間の価値観、世界観、倫理観等も急速に変化している。激動の時代に直面する人文科学の変革と再構築は、否応なしにわれわれに迫っている。

戦後、燦然たる業績を誇る古代文学の研究も、いまや時代の波に呑み込まれて窮地に立たされているように見える。民族の文化遺産、人文精神を具現する古代文学とその研究は、社会の急変に如何に対応するのか、これまでの研究をどう見直すのが、課題となる。

その意味で本日行われるシンポジウム「生きて行く古代文学」は、人文科学変革の一環として、極めて現実的な意義を持つものと思う。これから私は、外国人研究者また教育現場の一員として私見を述べさせて頂きたい。

一 古代文学研究の定義と意義

古代文学とその研究は、大体①古代人が残した文学作品、②古代人が残した文学作品に対する歴代の解釈と批評、③歴代の解釈や批評の是非に対する検討と新たな研究への展開、という三つの部分からなるものだろうと思う。厳しい状況の中で、この三つを生きて行かせるためには、まず古代文学の持つ価値及びそれを研究する必要性、つまり人文科学領域において、古代文学の研究は如何なる意義を持ち、どう位置づけをすればよいかを改めて考えなければならぬ。

周知の如く、日本民族が誕生して以来の人文精神と芸術精神を凝縮した古代文学は、人類精神文明史の一部であり、世界の貴重な文化遺産の一つでもある。日本古代人の感情

や物の考え方や文芸思想を具現するものとして、当然重要な研究価値を有する。つまり古代文学を抜きにしては、日本の歴史や古代文化はもろろん、日本人の価値観、世界観及び日本人の美意識と日本人のアイデンティティを語ることはできない。この点に関しては、まず日本古代文学が持つ特質からお話をしたい。

1 文学生産プロセスの短縮能力と包容力

他の国に比べて、日本古代文学は文字によって記録される時点で、作品の種類と内容及び表記手段、文体、文学様式などにおいて既に多種多様さを呈している。つまり上代文学作品『古事記』『日本書紀』『懷風藻』『万葉集』『風土記』は、ほぼ同時代に誕生したのだが、その内容は神話と伝説、史的物語と歴史、男女の恋愛生活と貴族社会の風雅風流及び庶民の喜怒哀楽、各地の地理環境と民俗風習などを包括し、文学の体裁と様式も散文、伝承歌謡、記載和歌、漢詩というように分かれている。

中国の場合は伝誦文芸の『詩経』（前五世紀）から個人の作品集『楚辞』（前三世紀）に至るまではほぼ三百年間もかかり、『詩経』から歴史伝記文学『左伝』、『国語』、『戦国策』（前三世紀）の出現までは二百年間以上、歴史書『史記』（前九一年）の誕生までは、ほぼ四百五十年間もかかった。

しかし日本の場合には、他の民族、国が数百年間、何世紀にも亘って漸次に形成させた文学ジャンルと文学様式を八世紀という一つの世紀で、ほぼ百年間以内に一気に完成させたのである。この文学生産の過程と文明形成の歴史の間を短縮させる、また短縮できる優れた能力は、上代に限らず日本近代文学と文化の形成にも再度応用された。このような現象は世界文学史と文明史にも稀に見るもので、世界では「空前」とは言えるが、日本では「絶後」とは言えない。

文学生産プロセスの短縮能力及び短縮できる条件と歴史的背景には、もちろん当時日本より一歩進んだ大陸文明に対する懸命な吸収と受容があり、外国の文化と文学を実用的効率的に消化して自国の文学の確立にいかす、その過程における変容改革の悪戦苦闘が隠されている。それは表記手段としての漢字に対する複雑な応用（音訓交用、借字、借訓、戯書）、純粹な漢文体から変体漢文、さらに和漢混合文体への変革、外国語と外国文学様式で創作する漢詩から自国の言葉で吟詠し万葉仮名で記録する和歌への変貌、文学作品の内容及び文芸思想における儒教と仏教及び道教の観念に対する吸収と応用などによって示されているが、先進文明を取り入れる包容力と調和力がなければ、到底できるものではない。先進文明を素早く導入し、それを自国

の文明形成に生かす日本文化の特質と特徴は、今日に至っても変わるものではない。

2 素材と内容の豊富さ

日本上代文学はその誕生した時点で、作品の種類、表記手段、文体、文学様式の多種多様さを見せるほかに、素材と内容にも極めて豊富なものがある。例えば『古事記』『日本書紀』には天地開闢、よろづの神々の誕生、天孫降臨、国土の創成、国家の樹立など、つまり神の世から人の世までの神話伝説が纏まりのある体系で記録されているだけでなく、数十代にわたる天皇の執政の歴史も皇位継承の順序に沿って記録されている。その素材としては、神話伝説、歌謡、神祇祭祀、儀礼風習、史実の記録などがあり、内容としては自国の在来神話伝説を主幹にして外国の素材や発想も織り交ぜ、土着信仰に儒教思想と仏教精神が入り交じっている。記紀に限らず『万葉集』も同じである。この大歌集には歌と漢詩、漢文、書簡、左注などが入り交じり、内容には通い婚を背景にした男女間の相思相愛、仏教の無常観による人生の儚さへの嘆き、自然と人間との融合、聖天子としての天皇や国家政治への称賛などがあつて、まさに日本古代人の感情と情調、思想と美意識を具現する文学宝庫だと言える。

日本上代文学に現れる作品の種類、表記手段、文体、文

学様式の多種多様さ及び素材と内容の豊富さは、国文学研究者に広々とした研究の天地を提供してくれるのみならず、外国人研究者特に比較文学的研究に従事する人間にも研究しきれない無尽なテーマを提供してくれている。従つて日本古代文学の研究者としては、これを充分誇りに思うべきである。

二 古代文学研究の価値と現状

中国の古代人は文学のことを「立言」だという。『春秋左氏伝』襄公二十四年の条にはこう記してある。魯の使者穆叔が晋の国に出かけた。晋の士大夫範宣子は近く郊外まで出迎え、穆叔に向かつて「古人の言葉に、死んでも朽ちないというのがある。どういう事か。」と訊ね、穆叔は「太上有立德、其次有立功、其次有立言。雖久不廢、謂之不朽。」と答えた。つまり中国古代の文化人は「立言」即ち「文学」を不朽たる価値を持つものだと見做している。これが「蓋し文章は経国の大業なり」という文学観にも繋がる。

文学の性質や風格においては日本と中国は相違するけれど、文学を文化事業の一環として日本の古代人も中国古代人と同様に重視していた。律令制度を導入して中央集権的国家の建設に全力を傾けた天武天皇は史書の編集を「王化

の鴻基」だと強調し、『懷風藻』の序文にも「風を調へ俗を化むることは文より尚きことは莫し」と記されている。かかる文学の重要性に対する認識には、勿論中国古代文学の影響が認められるが、当時、もし文学を尊ぶ政府の方針と文化事業を興さんとする社会気運が無ければ、中国古代の文学観を受け入れることはあり得ない。従つて日本の古代人は、文学のことを如何に重視していたかを、これらの名言または『古事記』や『日本書紀』の編纂、四千五百数十首の歌を集めた『万葉集』を見れば、もう贅言する必要があるまい。

しかし二十一世紀の時代転換期においては、文学の持つ価値についての見方には変化が起きているようだ。年々深刻化する古典文学離れの現象を見れば、残念ながら古代人の名言はもう通用しない感がある。国文学を志願する学生は激減、その代わりにコンピュータやパソコンや情報等の学科はともあれ、人文系の中でも人間心理や福祉への志願者が殺到している。なぜこういう現象が起きるのか。それについては私は社会風潮と教育との矛盾というように捉えている。

ご承知のように、文学創作そのものは、時代や経済状況の良し悪しに左右されるわけではない。二十世紀三十年代の中国は、政治的には最も暗黒で、社会も不安定だったに

もかわらず、有名な作品がたくさん誕生した。鲁迅、茅盾、巴金のような作家が輩出したのもその時代。日本でも夏目漱石が個人の生活状況が最も好ましくない時に、『ユーマアに満ち溢れた名作『吾輩は猫である』』を書いた。しかし文学研究は、そうはいかない。時代の変化や社会の風潮などは文学研究に大きな影響を及ぼす。日本の戦後を振り返つてみれば、経済の回復期には文学研究が軌道に乗つて多くの成果を収め、経済の高度成長期には文学研究が全面に花を咲かせ、社会にも文学を楽しむ余裕も出てきた。文学のサークル活動や短歌と俳句の創作も盛んに行われて、そのお陰で俳句は世界的に流行し、中国にも漢俳を作る風潮が現れたほどである。文学離れの現象は、この四、五年の間に起きたものだろうと思う。その背景には経済の不景気、企業の倒産やリストラの深刻化、新産業への模索などがあつて、いうならば日本社会は再び苦闘と調整の時期に入っている。「技術立国」というキャッチフレーズに象徴される実学重視の嵐が再び吹き始め、理科系離れの現象を是正するために文部科学省はスーパーサイエンススクールを設置したが、国語国文学離れの現象には未だに対応策がだされていない。

国文学教育の現状を見ると、まず中学校より作文の授業が少ない。漢文学や古典文学の勉強時間も大幅に短縮され、

とにかく今すぐ役立つようなものでなければ軽視され、難しいものを避けたいという傾向は年々深まっています。これが直接学生の学力の低下につながるし、古典への関心が急速に薄れていく原因の一つにもなる。

国文学の勉強或いは人文科学の研究は、すぐに社会や経済の発展に寄与するわけではない。しかしそれをおろそかにしてしまえば、将来必ずさまざまな分野にいろんな支障が生じてくる。というのは、科学技術などを掌握し、それを人類社会の発展に役立たせるのが人間なのである。その人間または人間の魂を築くのはほかならぬ人文科学である。その人文科学の基礎とも言える国語国文学を軽んじてしまえば、諸学科の研究に弊害をもたらし、社会全体に影響を及ぼすことになる。まさに憂慮すべき問題である。

二十数年前に、日本の大学生の漢詩漢文の教養に感心したことを今でも覚えている。「友好の船」を迎えた際に、多くの日本の大学生が杜甫や李白の詩を知っていたし、両国の古典文学に詳しい若者もいた。それに比べて中国の場合、当時文化大革命の影響で自国の古典に疎い若者がむしろ多かった。しかし二十数年後の今になっては、日本に古典離れの現象が生じて、中国と逆転したような感さえある。中国若者の古典に対する興味は、若干日本の若者に勝るかもしれないが、時代の急速な変化と生活の多様化で、

古典文学よりIT産業や貿易に興味を持ち、カラオケや友達にメールを送り、インターネットで愛を語ることに奔る学生も増えている。ただし中国の場合は、学校の教育に厳しいところがあり、古典文学がある程度解らないと大学に入れない。そして中国古典文学中の名詩・名言が現実生活の中で随時に引用され、マスコミのイベントの司会者などは古典の言葉や有名な詩句を引用するのが文学教養と造詣の深さを示すことになる。その意味で古典文学及び古典文学研究の直面する情勢は日本ほど厳しいものではない。しかし、今後経済の更なる発展及び情報化社会の実現などによつては状況が変わるかも知れない。従つて古典文学の存続と研究の意義及び現代社会生活の中における古典文学の新たな位置付けは、日本に限らず中国にとつても大きな課題だと言えよう。

以上申し上げた時代の転換期に現れるこれらの問題と現象を、われわれはどう認識しどう対応すべきか、真剣に検討せねばならない。私見を申し上げますと、古典文学の役割を過大評価してもよくないが、自信喪失する必要もない。厳しい情勢に直面して、我々は過去を点検して、古典文学とその研究をもう一度正しく位置付けをし、時代と社会の変化に沿う新しい道を模索すべきではないかと思う。

三 古代文学研究の回顧と展望

『旧唐書』には「求木之長者、必固其根本。欲流之遠者、必浚其泉源」という言葉がある。文化の生命力を保とうとすれば、必ずその根本を固め、文化のさらなる発展を求めようとすれば、必ずその源を浚う必要があると強調している。『懷風藻』の序文にいう「まさに先哲の遺風を忘れずあらむが為なり」も同じ考え方である。かかる考え方は東洋に限らず西洋においても同じだ。アリストテレスの『詩学』は、科学的分析の方法を用いてはじめて、詩歌や劇曲の持つ芸術的価値と人類文化の中における不動たる地位を確立したのである。その意味で、文学の研究は歴代の研究成果の蓄積の上で成り立つもので、先人の研究成果を無視することができないと同時に、過去の研究に止まることもできない。言うならば、研究方針や視点や問題の捉え方及び作品に対する理解などは、時代の違いによつて異なるし、研究の方法も常に更新してゆかねばならない。これがいわゆる研究の時代性という問題である。将来のことを展望するために、まずこれまでの即ち戦後五十年間の研究の歩みを振り返つてみる必要があると思う。次に外国人研究者として内ではなく、外からこの五十年間を大まかに振り返つてみたい。

1 五十年間の業績

日本古典文学の研究史は長く、独自の研究体系を作りだした。特に戦後の研究の進展が目覚ましい。それは次の(イ)、(ロ)、(ハ)、(ニ)、という四つの面から概括することができるのではないかと思う。

(イ)、人口のパーセンテージから見れば、日本の学会と研究会の多いことは世界でも有名。上代だけでも十余りあるという状態で、少人数の研究会や勉強会は数え切れないほどである。

(ロ)、学会誌や学術誌が多い。それぞれの学会には学会誌があると同時に、各大学にも『紀要』や『研究誌』があり、これだけでも数百種類にのぼる。加えて有志や友達で作る研究誌や小冊子などもあつて、まさに「汗牛充棟」である。

(ハ)、研究者が多く研究レベルも高い。人口の比例から見れば、日本研究者の数は恐らくどの国よりも多い。戦後、経済の飛躍発展を伴い、日本社会は安定していて、安保闘争や学園紛争等があつたが、中国のような十数年にわたつて社会全体が巻き込まれるような政治動乱は無かつた。大学教育と研究は基本的に途切れることなく一貫してきたし、また豊富な資金によつて日本の教育事業は史上にない発展ぶりを見せた。特に学制の改革で昭和二十年代から新制大学が発足し、国文学科、日本文化学科を設置する大学が急

増。国文学科のある国公立大学、短大は少なくとも数百校以上にのぼる。そのため各大学で古代文学研究と教育を担当する教員が非常に多い。またどの研究機関にも所属せず個人の趣味で研究に精進する人々を加えれば、古代文学研究者だけで何千人もいる。人数を見るだけでも、古代文学研究が日本で如何に盛んであつたかが解る。それから日本の研究者は政治や時勢に左右されることなく、自由な雰囲気の中で研究テーマを定め、「聖域無き研究」が行われてきたし、また「微に入り細を穿つ」研究によって、古代文学の研究は緻密でレベルが高い。但し研究者のレベルは高いが、学生の勉強意欲と学力は相対的に低下している。アンバランスの問題がある。そして研究者が勤勉であるが故に生産過剰の問題もあり、学術書が売れない市場飽和の問題もある。

(二)、研究設備と研究手段の発達。各大学に蔵書の多い図書館と優れた設備並びに豊富な研究資金があつて、教員の研究も多方面にわたる。写本の体裁、訓詁注釈、編纂・成立論、本文批評、表記・音韻・語法、構成論、主題論、作家論、作品論、比較文学など、まさに隅々まで行き渡つていると言える。研究の歴史が長きこと、研究範囲の広きこと、研究成果の多きことよつて、新たな研究テーマの発見は難しく、それに考証学文献学重視の学風を加えて研究

の趨勢はどうしても細分化されるようになる。一つの商品の作家の研究で、一生を終える例も珍しくない。

以上、(イ)、(ロ)、(ハ)、(ニ)という四つの面から、戦後の研究状況を簡略に概括したが、次にこれまでの研究に存在する問題点及び将来への展望をご参考までに述べさせていたたく。

2 不足点と将来への提言

(イ)、日本古代文学を世界文学の一部、日本古代文学の研究を世界文学研究の一環として捉える視点が必要ではないかと思う。言うならば、世界文明、文化事業、文学の進展は相互に運動して成し遂げられたもので、一国の内部で独自に形成することはめつたにない。中国の場合を見ると、秦以前の文学、例えば神話伝説の場合、多くの民族のものが入り交じつて、天地開闢だけでも数種類のものがある。ゆえに天帝の名は場合によつて、黄帝、炎帝、堯、舜を指し、場合によつては帝嚳、高辛、少昊、後稷を指すこともある。龍というトーテムも多くの民族の信仰物の一部を取つて、それを綜合したのが、地上にない怪物の形になつていゝる。従つて中国古代神話伝説の研究は漢民族のものだけでなく、少数民族のものも視野に入れなければならず、また神話伝説を世界文化現象の一つとして捉え、ほかの地域の民族神話との対比研究も自国の神話の特質を一層明らかに

にすることができ。最近、『神話と民族精神』という中国の若い学者の著書を読んで、その視野の広さとスケールの大きさに感心した。もちろん日本にもこのような研究書は無いとは言えない。但し日本神話を世界神話或いはアジア神話の中において捉え、表現や題材の影響関係を追求するのみならず、神話の思想や精神についての全面的、巨視的な比較はまだ少ないように私は感じている。詩歌研究の分野を見ても、契沖の『万葉代匠記』以来、中国古典文学との影響関係を探る大著は数多いが、万葉歌を世界詩歌の流れにおいて捉え、中国との比較だけでなく、世界或いはアジア諸民族の詩歌との広い範囲での比較はまだ多く認められない。そういう比較は、影響関係の追求というより、むしろ世界詩歌の形成において、日本和歌の創作原理、文学理念、文学風格、内容や表現方法の特徴を探求し、他民族の詩歌と比較することによって和歌の特質をより一層明らかにする。いわゆるグローバル的な研究はもつと多くあってもよいのではないかと思う。そういうグローバル的な研究によって、日本和歌史だけでなく、東洋詩歌史、東方詩歌史、アジア詩歌史或いは東洋詩歌の主題論、体裁論、表現手法論などの大著が生まれるのではないかと思う。これは決して妄想或いは奇想天外ではない。情報手段の発達、情報社会の実現、インターネットの普及、国際学会、国家

間の学者の交流の更なる進展によって、国境、学際を越えた研究は、これからますます盛んになるだろうと予想される。現に経済分野においては、地球経済の一体化やブロック化が進んでおり、一国だけの繁栄があり得ないのと同様に、近き将来一国だけの研究は不十分である時代が到来するのではないかと思う。一国、一分野の専門家の手による従来の研究パターンを打ち破って、二カ国間の異なる分野の研究者を集めて編纂する『日中文化交流史叢書』が既に出版されている。このような国境を越えた共同研究はこれからもますます盛んになるだろうと思う。特にインターネットの使用によって、世界範囲での研究情報の交換、研究資料の共用、研究成果の相互紹介が可能になり、これがソフトの面において国境や民族を越えた国際的、学際的研究に良い条件を提供することになる。我々はこれを利用して新しい研究方法を模索しなければならない。これが時代の要求であり、社会の発展が我々研究者に課せられた課題でもある。アジアにおける唯一の先進国・日本は率先的に垂範の役割を果たしてほしい。

(四)、これまで国際文化・学術交流の面において、日本は大きな役割を果たし、すばらしい実績がある。毎年、文部科学省と外務省に招待される外国人研究者が日本の研究機関や大学に入り、日本の恵まれた条件を利用して研究をし、

また日本は外国人研究者のために、国際日本文学研究集会、東方学会会議などのような場を提供して、日本学者と外国学者が一堂に集まり、互いに切磋琢磨をして研究を深めてゆく。これは非常にすばらしいことだが、但しこのような学会に参加する外国人学者は、殆ど日本文化、文学の研究を専門とする人たちで、言うならば、日本語を操ることのできる人が多い。その代わりにその国の文化、文学を専門とする研究者の参加はめつたにない。例えば日本古典の学会で、中国古典文学の専門家を喚んで来ることは殆どない。しかし『古事記』や『日本書紀』や『風土記』や『懷風藻』及び万葉仮名表記の研究は、むしろ中国古典を専門とする研究者の意見を大いに聞くべきで、彼らには優れた見解があるかも知れない。特に訓詁注釈、比較文学的研究においては、日本国内でも漢文学研究者と国文学研究者の意見が必ずしも一致するとは限らない。従つて学科を越えた学際的な研究はこれからも広い範囲で行われる必要がある。そういう研究によつて、日本古典文学の研究は一段と花を咲かせるに違いないと私は思う。

(イ)、時代の流れや時勢に迷うことなく、古典文学研究の伝統を守ると同時にさらにそれを発展させ、社会のニーズを考慮して、研究方法、手段を改革し、古典文学の必要性、古典文学研究の楽しみを宣伝し、アピールすることを強化

する必要がある。文学の研究は時代や社会の変化、経済事情などに左右されることは、どの国においても避けられない。中国現存最古の詩集『詩経』を例にしてみれば、周の時代では詩をテキストとして貴族の子弟たちに教え、人格の育成に役立たせたわけだが、春秋時代では『詩三百』の研究は、儒教の教義を宣揚し、また「賦詩言志」というように、社交や外交の場に利用されていた。漢の時代に入ると、国力の増加、社会の安定、経済の繁栄に加えて儒教が尊重され、そのためこの詩集は「経」と冠されて国学にまで定められた。しかし漢王朝の崩壊とともに儒教の政治的地位が下がり、戦乱や国土の分裂及び社会の不安定という厳しい情勢の下に、人生の悲しみや世の儂さに対する嘆きなどで、政治を暗に批判する玄言詩、自然に煩惱の解消を求める山水詩が盛んに作られ、研究者の指針も文学の内在する法則の探求や詩文集の編纂に傾いた。『詩経』そのものの研究はあまり進展しなかった。唐の時代、孔穎達の『毛詩正義』のような権威のある注釈書が誕生したが、詩の解釈は漢の時代のそれとさほど変わるものではなかった。宋の時代には詩経学の研究はようやく新生面を切り開き、一部の文化人らは乱れた人心と衰微した世の中を是正しようとして理学を創立させた。これらの理学の学派は従来の研究に疑問を持ち、義理弁明の立場から、詩の新しい解釈

を試み、歐陽修の『毛詩本義』や蘇轍の『詩集伝』と朱熹の『詩集伝』が誕生したが、元と明の時代に入ると、朱熹の『詩集伝』が科挙試験の材料として使われただけで、ほかにたいした研究が生まれなかった。清の時代、特に康熙帝と乾隆帝の時に訓詁考証学が盛んになって、詩の文字や音韻、名物、制度などを細かく考証し、大きな成果を上げたが、その方法と学風はあまりにも煩瑣で、新中国が誕生してからそれに対する批判も出てきた。文化大革命の時代に文学の研究は階級闘争に利用され、『詩経』中の政治批判、社会風刺、民衆の不満を詠む詩は高く評価されるが、恋愛詩は殆ど取り上げられなかった。『詩経』の全面的な研究は八十年代半ば頃からスタートしたのである。

この『詩経』の例で解るように、古代文学研究はその時代の特徴があり、社会風潮にある程度影響されるものである。日本古典文学研究も戦後の再始発期、発展期、高潮期を経て、今は正に調整と再出発の時期に入っていると私は思う。つまり二十世紀の終焉とともに古代文学の研究も一時代を終えたと認識すべきである。一時代を終えたというのは、即ち研究成果の多きによって包括的に論述する大著の出版が難しく、生活スタイルの変化によって専門的な大著を書いても読む人が少ない。研究の細分化によって研究領域がますます限定され、統括した文学史が書きにくくな

り、研究テーマもますます狭く少なくなる傾向にある。研究方法もある程度行き詰まっているように感じられる。本文批評、作家論、作品論、主題論、歴史社会的、民俗学的比較文学的研究など、従来の研究方法は使い尽くして新しい方法は見いだせない。これらの問題の解決は今後の模索に期すべきであろう。

(二)、古代文学教育の問題。社会では漢字や文章もろくに書けない学生が増えているのに、大学教育では国語国文学離れの現象が日増しに深刻化している。正に矛盾している現象だ。その理由の一つには就職の問題がある。国語国文学は一般教養であって、すぐに役立つ或いは特技のようなものではない。勉強には歳月がかかるが就職には無用。これが大きな原因の一つになる。もう一つは経済の低迷によって将来に対する不安が大きく、なんとかしてお金を稼いで将来に備えるのが大事で、時間を掛けて「なりけりあらんや」の古文を読解する暇がないし、觀賞する暇も力も当然ない。十数年前に、万葉ウォークの生中継をする際に、二上山の中腹で振り返ると、数千人の老若男女が後ろについているのを見て「万葉をやってよかったなあ」と感無量であったが、今は万葉の講義をすれば授業を取る学生が皆無とは言えないが、四、五人がいれば満足するような状況。それに教員と学生との学識の差はあまりにも大きく、それ

を埋めるには教授法の問題がある。如何に解りやすく面白く講義するかが大事である。それから国文学教育の強化にはマスコミの役割が大きい。日本語の乱れや文学の白痴化はまずテレビのタレントから生まれ、それが若者に対する影響は決して軽視できない。日本語の純化、表現の美しさを提唱するのは、まずマスメディアからやらなければならぬ。そして国語国文学教育の重要性もマスコミによつて宣伝すべきで、古典文学題材にして現代風にアレンジする番組もたくさん作る必要がある。寡聞にして『源氏物語』の劇や映画はあるが、万葉歌人、例えば柿本人麿や山上憶良、或いは額田王の人生と歌の創作を波瀾万丈のストーリーで展開するような劇や映画は見たことがない。テレビの番組で「暗号説」（その内容については異議がある）が扱われて話題になって以来、万葉は一時多くの市民の興味を呼び寄せた。従つてマスメディアを通して古典文学に対する関心を呼び戻すのが一つの方法だと思ふ。

以上「危機と再生の中を生きる古代文学」について私見を述べたが、小生自身も今の世相に戸惑いが多いため、今日の話に認識の浅さや誤謬乃至立場を忘れた勇み足も免れないが、「擲磚引玉」（蝦で鯛を釣る）という役割を果たせば、幸甚に存する次第である。